

<特集随想>片足だけの靴

浜田, 泰子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

51

(開始ページ / Start Page)

119

(終了ページ / End Page)

120

(発行年 / Year)

1995-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019809>

片足だけの靴

浜田 泰子

外間先生はなかなかお洒落な方である。いつもおだやかな物腰で、質のよい物をきちんとお召しになっている。帽子などもお好きなようだが、自然の雰囲気馴染んだ着こなしをしておられ、全体的にあたたかな印象を受ける。お話の中で、「ヨシノヤの靴は憧れをもつ靴です」とか、「ハッシュ・パピーの靴は履き易い」とか、「お洒落なバーバリーのコート」といったことを聞くことがあったので、そういう物をお召しになっているのかもしれない。他の方の装いにも敏感で、茶目つ氣を交えながら「そのタートルネックよく似合ってるね」、「そのジャケットなかなかお洒落ですね」と会話のとは口におっしゃる。法政の学生以外の聴講生も多い大学院のゼミや研究会などでは、そんな風にひとりひとりに声をかけられ、場になじめるよう、居心地よく学べるよう、心配りをされる。

また、おいしい物がたいへん好きで、よく学生の私たちにごちそうをしてくださった。舌鼓をうつ私たちを満足そうに眺めながら、すしを食べ終えた後の醤油皿には醤油が残っていないのが粹、そばをじやぶじやぶとつゆに浸しては不粹などと、精神的なお洒落についても

蘊蓄をかたむけられた。

そのお洒落な先生がある日、片方にフォーマルな黒い靴、もう片方の足にねずみ色のサンダル履きといった出で立ちで研究室にいらしたことがある。その日は学部の授業がある日で、いつもの時間より大分遅れてお見えになった。あまりにふつりあいなお姿にびっくりするやら、何だかおかしいやらで、どうなさったのですかとたずねると、大したことはないが足を捻挫し、靴が履けなくなりましたとおっしゃられた。そして先生ご自身は、サンダルを履いていることがとても気に懸るごようすであった。両方ともサンダルになさればよいのに、よっぽど慌てていらしたんだわ、私はそう思った。この光景があまりにも印象的だったので、その後またたびたび思い出された。が、後々になつてはつと思ひ至った。そういえば外間先生は、ご講演のときはもちろん、ご講義、研究会にはよっぽどの暑さの日は別として、ネクタイにスーツ、あるいはジャケット着用のきちんとした格好で臨まれる。あの捻挫された日に先生は、靴とサンダルの両方を履いているというバランスの悪い格好ではなく、片足にでもサンダルを履いているこ

とを気にしていらしたのではないだろうか。たとえ片方の足だけとはいえサンダルを履いたくだけた格好では、講義を受ける学生たちに失礼で申し訳がないと考えていらしたのではないだろうか。せめてもう片方の靴で、精一杯の礼儀を尽くされたのだ、今はそう思っている。

先生は、沖縄文化の源流をたずねるため、また、沖縄と、島嶼という地理的な類似条件をもつ国々に生まれた歴史や文化の比較を試みるために、日本各地はもとより、韓国、ハワイ、フィジー、オーストラリア、ヨーロッパとさまざまな地へ出掛けておられる。調査、研究のかたわら、その土地土地のおいしい物を食され、文化、芸術にふれら

ゼミ合宿の思い出

外間ゼミの名物の一つに、毎年沖縄現地で行っているゼミ合宿がある。今年で十四回を数えたわけだが、この合宿は法政一・二部、大学院のゼミ生だけでなく、その他の外間先生の講義を受講している学生をも含め、総勢百人あまりが参加する他に類をみない多人数の合宿であり、まさに外間先生を囲んでその教え子たちが一堂に会する年に一度の大イベントである。

今年度は、去る十月に四泊五日の日程で行われた。前半は沖縄本島

れ、空気そのものまでも楽しまれていようである。そのリベラルな先生が、片方に靴、片方にサンダルをお履きになった。身を装うことに関して、相手に失礼がないようにと考えられるお人柄なのだ。単に自分の好みに合ったよい物を身に纏うのではなく、相手に対して礼を尽くす、相手を大切にしてお洒落。こういうお洒落もあるのだと気付かされた装いであった。

片足だけに靴、その日は、卒業記念のアルバムに載せる写真の撮影日でもあった。

(はまだ やすこ・旧姓 中江・一九八九年博士課程修了)

崎山保

の首里と与勝半島と本部半島に視点をあてて沖縄の祖神アマミクの足跡を尋ね、後半は宮古島で宮古島の歴史の拓け方、特に北の池間島・大神島・狩俣の構造的な関わりについて学習した。

十月といっても、沖縄では半袖で十分過ごせるし、宮古島においては三十度を超える暑さで日焼けするほどだったのだが、そんな厳しい暑さの中でも外間先生は精力的に活動され、私たち学生に懇切丁寧に一つ一つの遺跡を解説された。